

地上の星(27) 升崎外彦物語

親鸞からキリストへ 無私の愛に生きた伝道者



浄土真宗の盛んな北陸の名刹に、母の命と引き換えに生まれる。英才ぶりを発揮し、将来を嘱望されるも、“南無阿弥陀仏”が理念に過ぎない、と煩悶。危険視されたヤソ（キリスト教）にだけは近づかなかったが、ある夜、偶然にも救世軍の伝道師が説く聖書のことばが外彦の心を射抜いた。「すべて労する者、重荷を負う者、我に來たれ、我汝を安ません」（マタイ 11：28）

たちどころにこれが真理であると直感し、ほどなく入信。西南戦争に加わり剣の達人でもあった父は、怒りのあまり日本刀で襲いかかり、外彦は生涯消えることのない傷を負った。しかし、家を追い出され、狂人扱いされても、弱者への愛、謙遜はいよいよ深まり、伝道の実は徐々に結ばれた。特に自殺の名所と呼ばれる南紀白浜のほど近くに建てた「労瘠学園」での教育は、キリストの愛をいかに示すものである。あれほど反対した父も、反駁のため聖書を何度も通読するうちに自分の過ちを悟り、ついに感涙のうちにキリストを信じ、天に凱旋した。前回扱った榎本保郎にも多大な影響を与えた升崎の劇的な生涯を辿ります。

記

1. 日時：2月7日（金） 10:30 AM より
2. 場所：ゴスペルホール（電話 026-295-6705）
3. 講師：尾崎富雄（ゴスペルホール代表）

入場無料。どなたでも参加できます。